

中国人労働者の被爆「二重苦」知る



川原洋子事務局長
広島市中区

第2次世界大戦中に日本に連れてこられ、安野発電所(安芸太田町)の建設に従事させられた中国人労働者や遺族と交流を続けてきた広島市の市民団体が、18、19両日、歴史の継承をテーマに集いを開く。過酷な労働と原爆被爆の「二重苦」を強いられた中国人男性の遺族も参加する。

中国大陸から日本国内への労働者の「移入」は、労働力不足を補うため、1942年11月に日本政府が「華人労働者内地移入二閣スル件」と題する閣議決定をしたことから始まった。戦後に外務省が作成した報告書によると、約4万人が労働者として日本各地の炭鉱や建設現場などに連れて行かれ、約7千人が死亡した。安野発電所の建設現

18・19日「継承する会」遺族招き集い



孟昭恩さん
継承する会提供

場では、西松組(現在の西松建設)のもとで360人が働かされ、29人が亡くなった。

集いを主催するのは「広島安野・中国人被害者を追悼し歴史事実を継承する会」。発電所建設現場で働かされた中国人の元労働者らは98年、西松建設を相手に謝罪と賠償を求めて提訴した。

2007年の最高裁判決

で原告敗訴が確定したが、判決は西松側について「中国人労働者らを強制労働に従事させて相応の利益を受け」ていたと指摘。「被害の救済に向けた努力をすることが期待される」とも求め、これを受けて09年、訴訟外で和解が成立した。こうした経過の原動力となった市民団体が「継承する会」の母体で、生存者や遺族を日本に招くなどの取り組みを続けてきた。

中国河北省出身の孟昭恩さん(2009年死去)は、発電所建設現場で働いていた360人の1人だ。

1945年の敗戦直前、この建設現場で起きた反乱事件で広島刑務所に送られた。

刑務所があったのは、原爆の爆心地から約2kmの地点。生前、市民団体の聞き取りに、自らの被爆体験について「窓の外でピカッ

光がひらめき、雷が光ったみたいでした」と証言。93年、被爆者健康手帳を取得し、今年1月には国立広島原爆死没者追悼平和祈念館に遺影が登録された。

来日するのは三男の孟憲法さん(55)。18日午後2時から広島市中区の広島弁護士会館で開かれる「被爆者・孟昭恩さんの生涯をふりかえる集会」(資料代500円)で思いを語る。翌19日午後1時半に中国電力安野発電所そばの「中国人受難之碑」前である追悼行事にも参加する。

継承する会の川原洋子事務局長(75)は「強制連行された中国人も原爆で被爆した事実や、草の根で続いていた日中の和解の取り組みを知る機会になれば」と話す。問い合わせは継承する会(080・3880・8340)。

(武田肇)

二二一入短信

◆安野中国人受難之碑で追悼集会 戦時中に中国から連れて来られ、安野発電所(安芸太田町)の建設に従事して亡くなった中国人労働者を追悼する集いが19日、発電所近くで開かれた。木村富美副町長ら約50人が参加し、歴史の継承を誓った。集いの会場となった「安野中国人受難之碑」は2010年に建立された。碑には「360人の中国人が過酷な労役に従事させられ、原爆による被爆死も含めて29人が異境で生命を失った」と刻まれている。

市民団体の主催で18回目。強制労働に従事し、広島で被爆した故・孟昭恩さんの三男、孟憲法さん(55)は「私たちは戦争を起こさないように最大努力をしなければなりません」とあいさつした。

